

有珠山の火山活動解説資料（令和元年10月）

札幌管区气象台
地域火山監視・警報センター

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められません。
噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・ 噴気などの表面現象の状況（図1-①～④、図2～5）

15～17日に現地調査を実施しました。山頂火口原I火口では、長期的な熱活動の低下傾向が続いています。西山西麓火口群N-B火口の噴気活動は引き続き低調で、赤外熱映像装置による観測では、2008年以降火口温度の低下した状態が続いています。その他の火口の状況についても、昨年と比較して活動状況に変化は認められませんでした。

監視カメラによる観測では、山頂火口原からの噴気の高さは火口縁上100m以下で、噴気活動は低調に経過しました。

・ 地震及び微動の発生状況（図1-⑤、図6）

火山性地震は少なく、地震活動は低調に経過しました。地震は山頂火口原直下の海面下1km付近及び2km付近で発生しました。

火山性微動は観測されませんでした。

・ 地殻変動の状況（図7）

火山活動の高まりを示すような地殻変動は認められませんでした。

この火山活動解説資料は札幌管区气象台のホームページ(<https://www.jma-net.go.jp/sapporo/>)や気象庁のホームページ(https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)でも閲覧することができます。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、北海道大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています（承認番号 平29情使、第798号）。

今回の火山活動解説資料（令和元年11月分）は令和元年12月9日に発表する予定です。

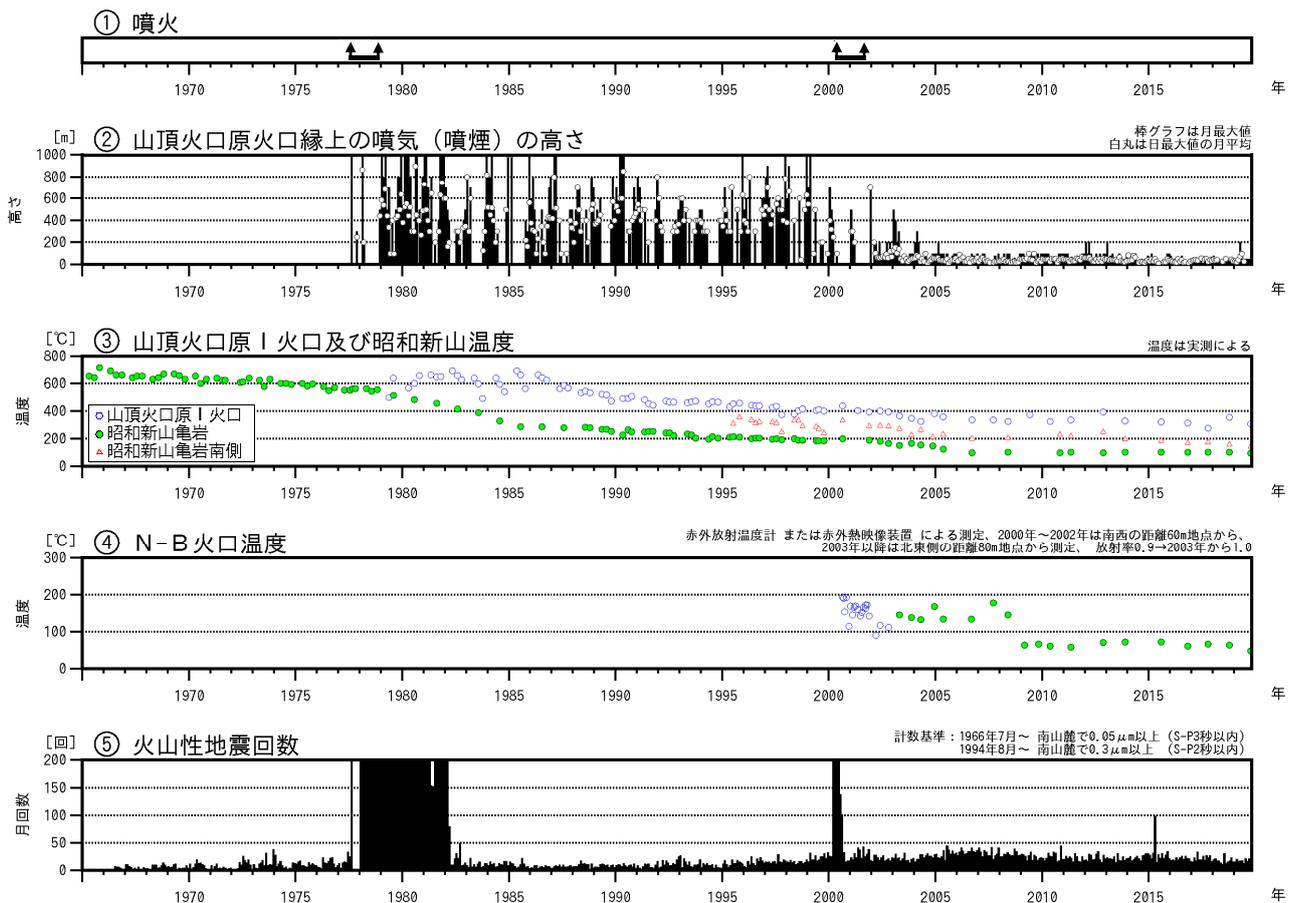


図1 有珠山 火山活動経過図（1965年1月～2019年10月）
 ↑印で挟まれた期間は噴火活動期を示します。

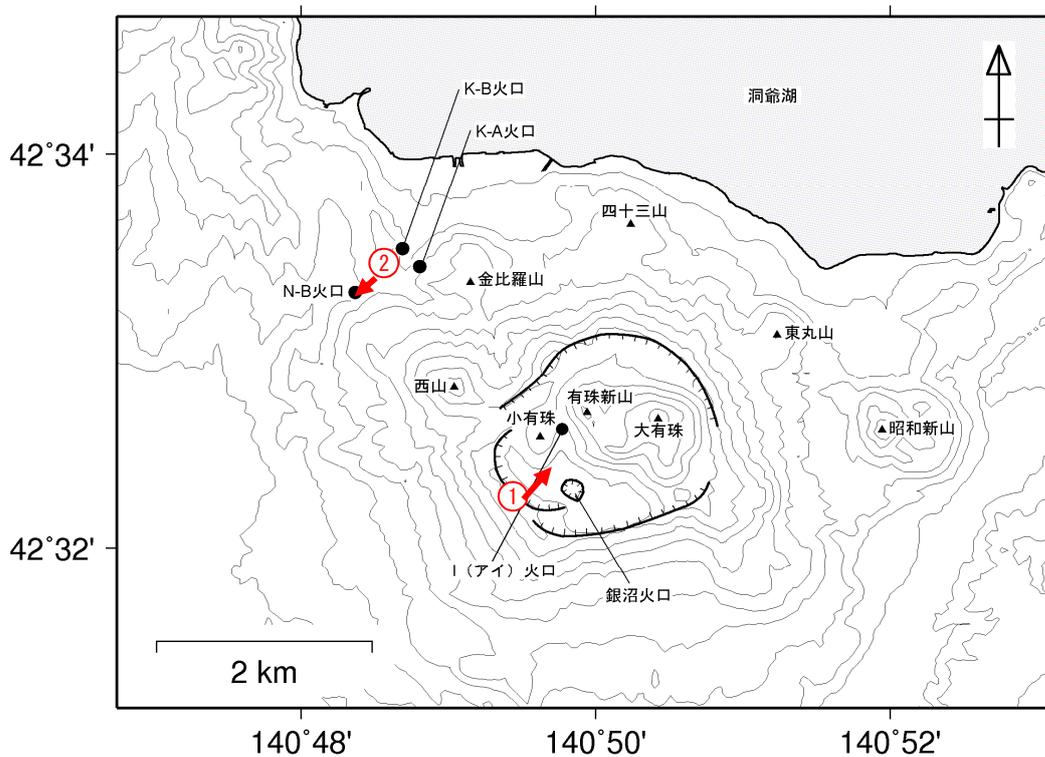


図2 有珠山 周辺図と写真及び赤外熱映像の撮影方向（矢印）

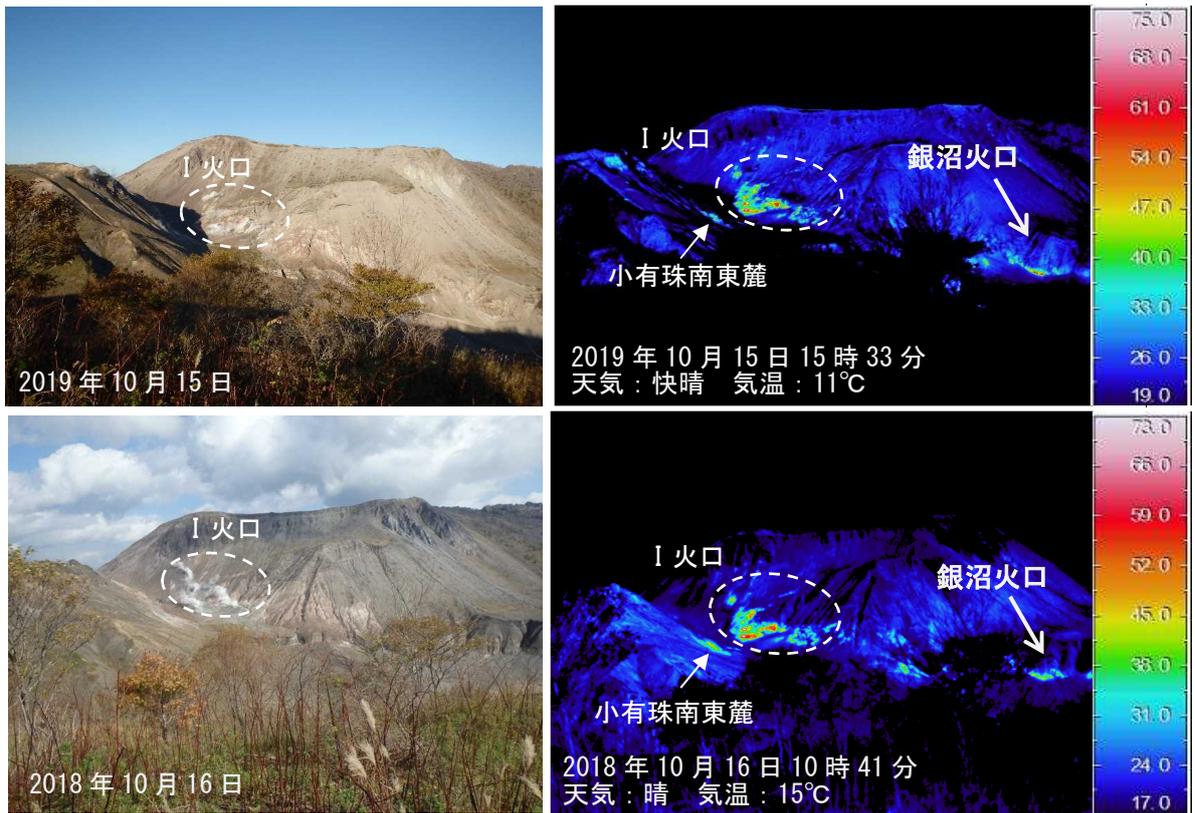


図3 有珠山 赤外熱映像装置による山頂火口原の地表面温度分布

図2の①から撮影

・前回（2018年10月16日）の観測と比べて地表面温度分布に特段の変化はありませんでした

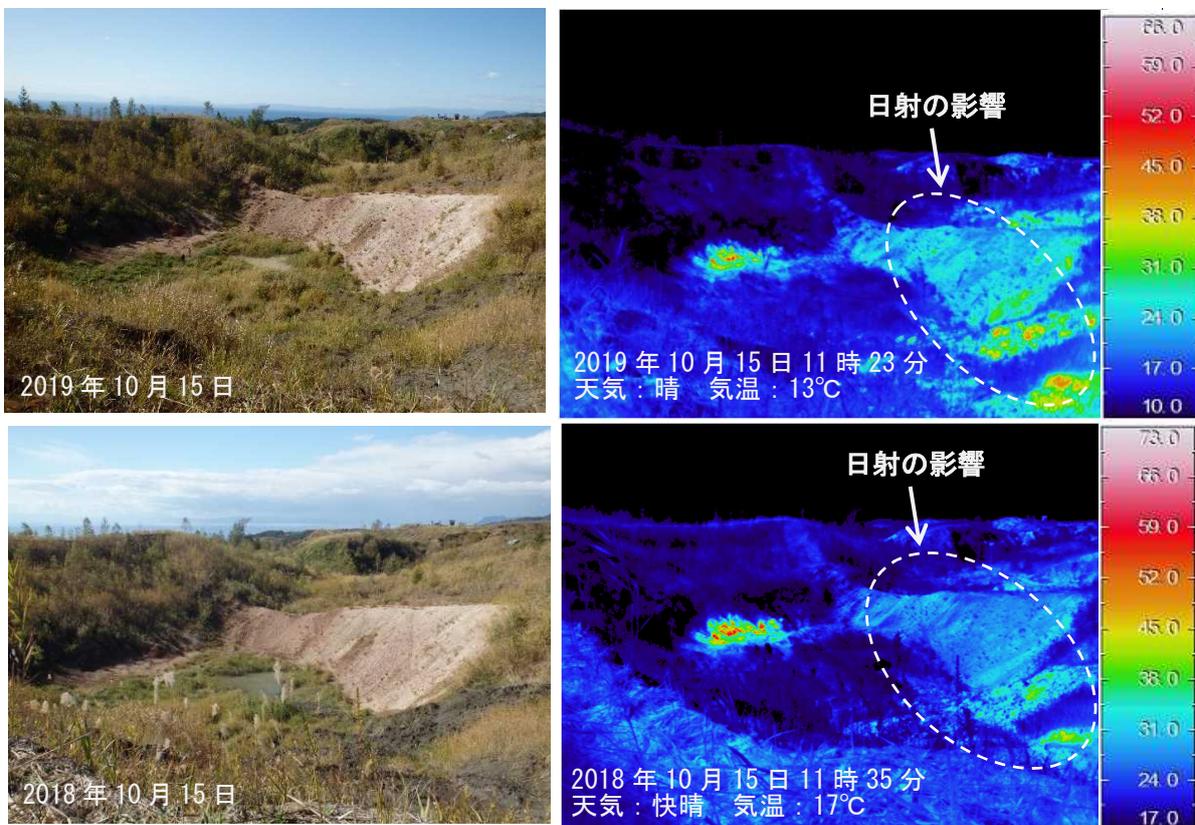


図4 有珠山 赤外熱映像装置によるN-B火口の地表面温度分布

図2の②から撮影

・前回（2018年10月15日）の観測と比べて地表面温度分布に特段の変化はありませんでした



図5 有珠山 北西側から見た山体の状況（10月31日、月浦監視カメラによる）

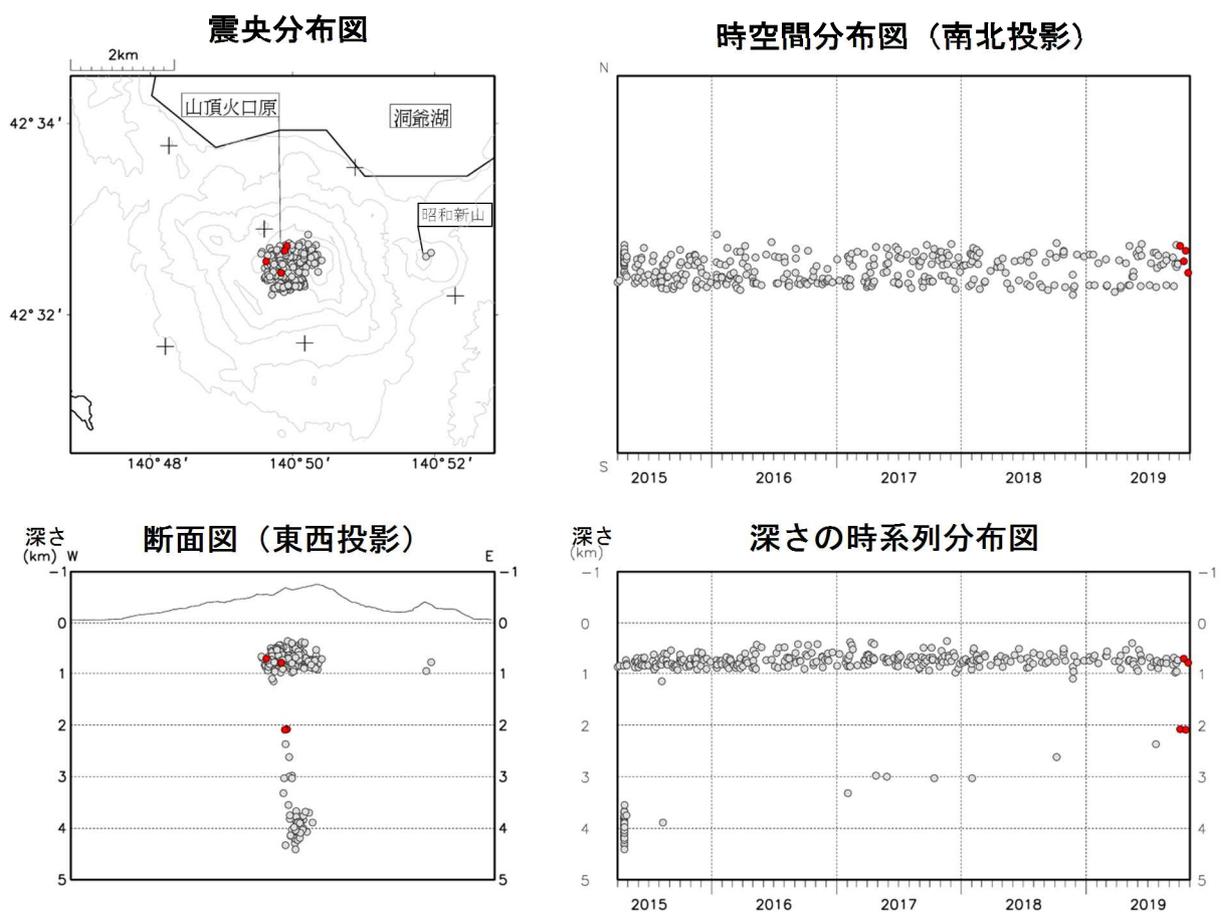


図6 有珠山 火山性地震の震源分布（2015年4月～2019年10月）

●印：2015年4月～2019年9月の震源 ●印：2019年10月の震源

+印：地震観測点

・地震は山頂火口原直下の海面下1km付近及び2km付近で発生しました。

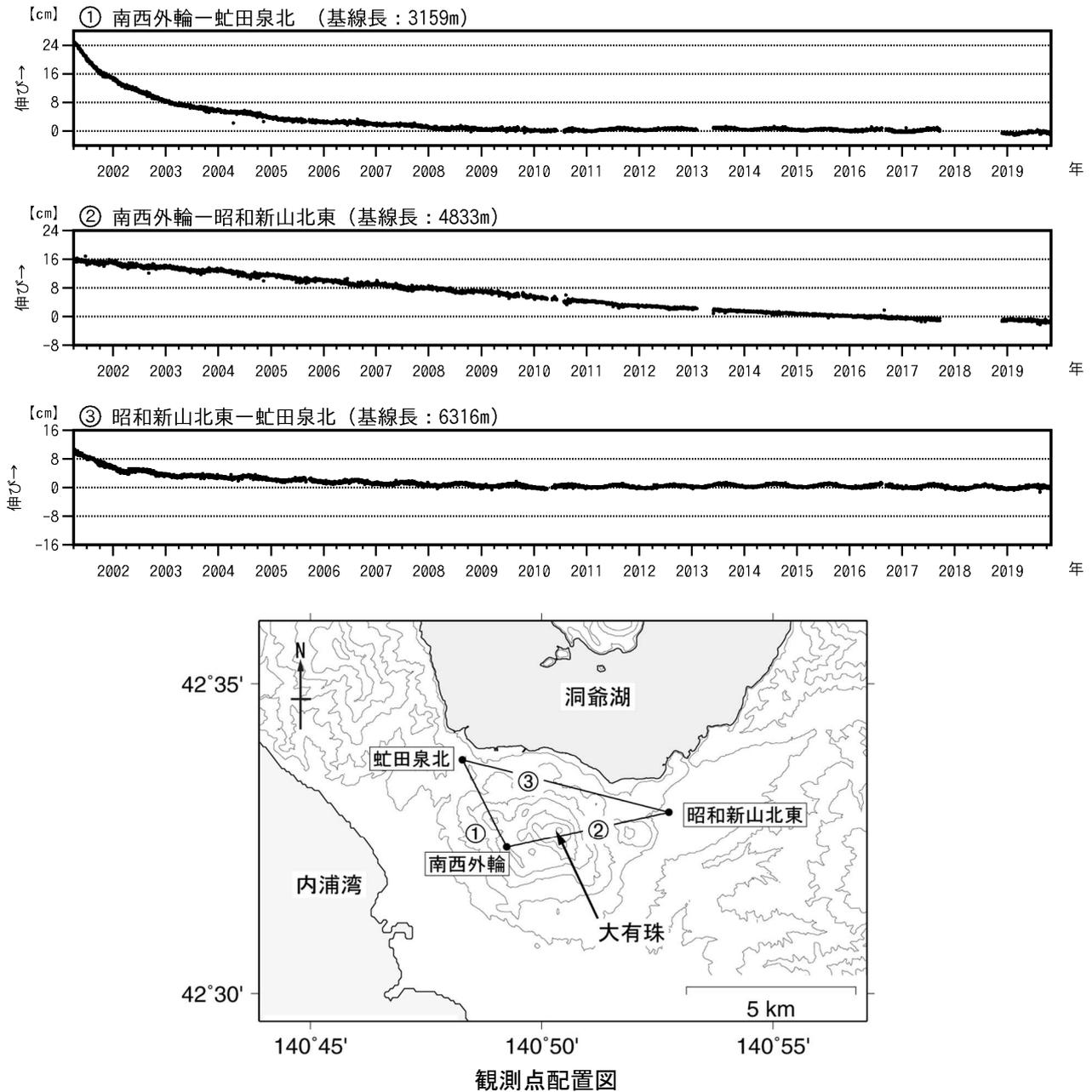


図7 有珠山 GNSS連続観測による基線長変化（2001年4月～2019年10月）及び観測点配置図
 GNSS基線①～③は観測点配置図の①～③に対応しています。
 GNSS基線の空白部分は欠測を示します。
 2010年10月及び2016年1月に解析方法を変更しています。
 ・②の基線長変化は、1977年から1978年の噴火以降、1982年3月まで続いた山体隆起が沈降に転じ、現在も続いていることを示しています。

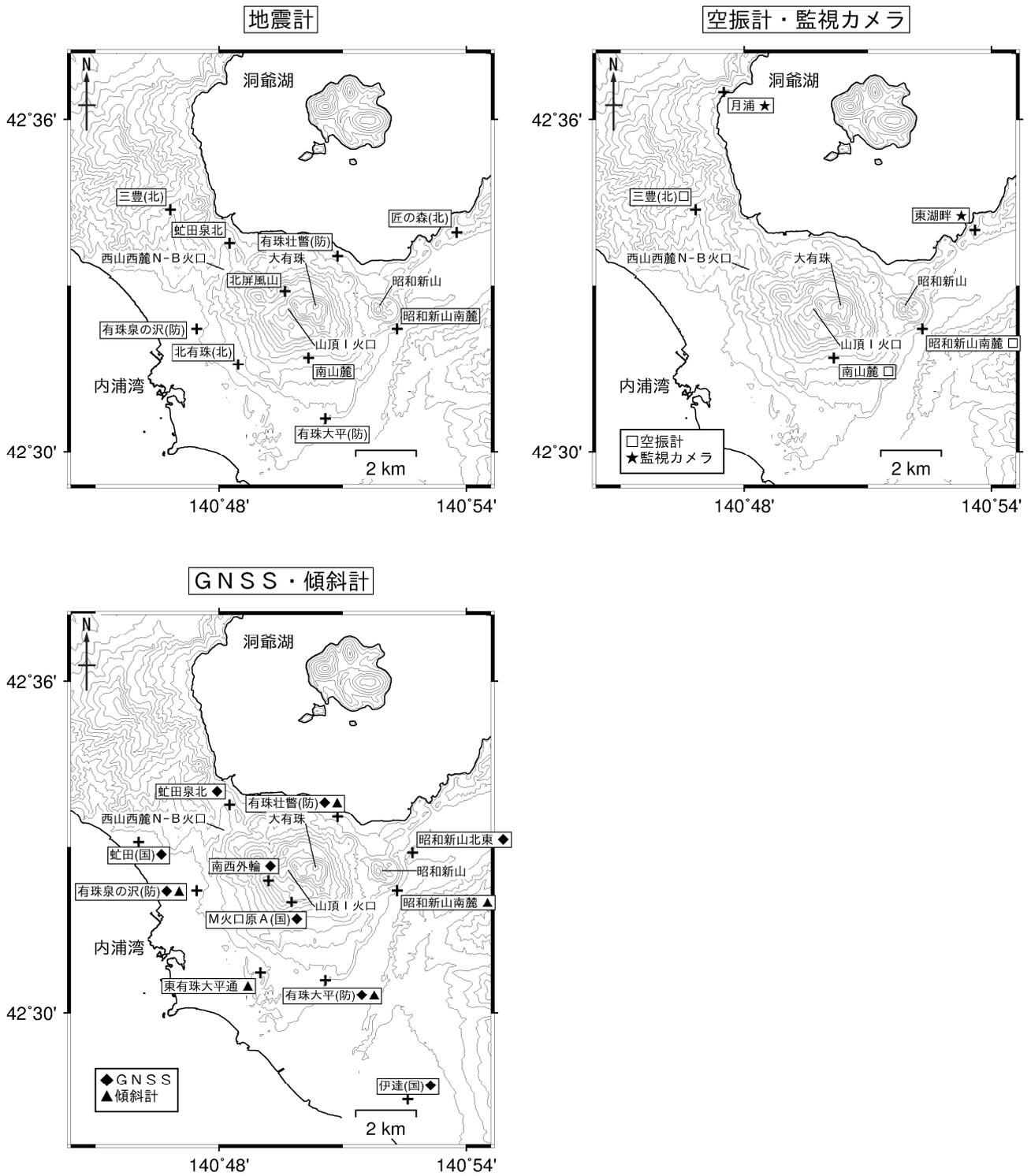


図8 有珠山 観測点配置図

+印は観測点の位置を示します。

気象庁以外の機関の観測点には以下の記号を付しています。

(国)：国土地理院

(北)：北海道大学

(防)：国立研究開発法人防災科学技術研究所